

あお き かま た ろう

青木鎌太郎

事業経営には「運、根、勘」が必要
— 中京工業界の機関車役 —

青木鎌太郎 (1874 ~ 1952)

出典：『中京財界50年』

■ 生い立ち

青木鎌太郎は、1874(明治7)年、名古屋区富沢町(現・名古屋市中区)の江戸時代から続く宿屋の青木與吉の長男として生まれた。若い頃は、当時ハイカラな自転車に乗るモダンボーイであった。

地元の名古屋商業学校を卒業後、神戸のドイツ人経営の商館に入社し、貿易の仕事に従事した。

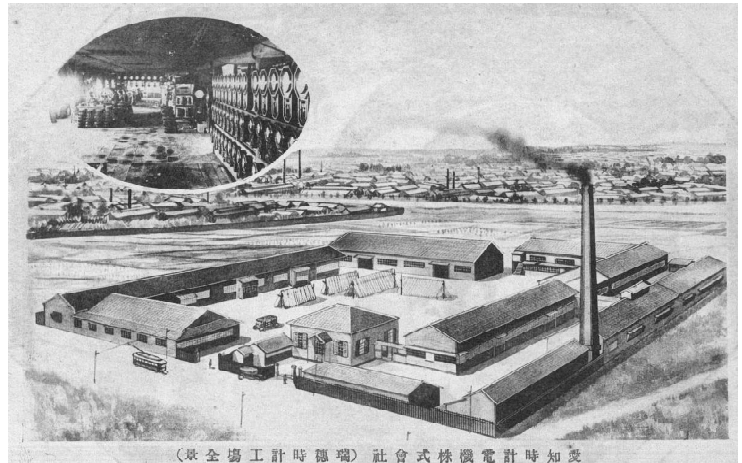
■ 愛知時計電機を復活させた手腕

北清事変(義和団事件)勃発時に、名古屋産の柱時計は輸出が出来なくなり、神戸港頭に山積されていた。青木鎌太郎は、その名古屋産柱時計の共同販売店の主任となり、中国へ渡り、輸出を再開させ、かつ、販路を広げた。このことが愛知時計の鈴木惣兵衛社長の目に留まり、1900(明治34)年、愛知時計の専務取締役として入社、同社の再建を任されるに至った。この時、愛知時計は会社としては

減資をするほどの苦境であった。青木の役目は、愛知時計の業績の回復であった。役員待遇でありながら、職工と汗を流して職務に精励した。結果として、時計業を持ちなおし、新たな電気業へと進出することもできた。この時の経験から経営とは、「運」、事業自体のその事業が盛んになる運気をも必要、「根」、運気が来るまでやり抜く忍耐、根気が必要、「勘」機敏に正しい判断を下すことが必要といった経営観を持つようになった。

この「愛知時計(当時)」を復活させた手腕から、多くの不採算な事業の再建を要請され、困難と知りながらも、これを引きうけた。

青木は、愛知時計において水道メーターの生産を初め、新規の事業にも積極的に進出をし、当時旺盛だった軍需を取り込み、放送設備、航空機生産にも進出して、「愛知時計」を「愛知時計電機」へと成長させ、現在にも続く企業の基礎を作り上げ、1926年に愛知時計電機の社長に就任した。



(瑞穂工場時計電機株式會社)

愛知時計電機株式会社の瑞穂工場

出典：絵はがき(筆者蔵)

■ 中京工業界の機関車役

青木鎌太郎は、戦前の中京地区(愛知県)の地位向上に努力し、かつ、尾張藩時代から続く商工業者と、新興の商工業者の融和を図り、重工業都市への発展に尽力した。戦前の名古屋財界の調整役であり、東京の財界とのつながりを取り持ち、中京地区に足りない事業、設備、新規事業開拓を推し進める機関車役(牽引役)の実業家であった。

1936年から1940年、名古屋商工会議所の第11代会頭を務めた。また、1943年から1946年という激動に時代にも第13代会頭を務めた。

青木は会社の事業以外に、名古屋観光ホテル、東邦瓦斯、東陽倉庫、日本放送協会に関与し、名古屋市長大岩勇夫の推進する事業、汎太平洋平和博覧会開催にも関与した。

(杉山清一郎)



愛知時計電機株式會社名古屋古港4号地格納庫

愛知時計電機の名古屋港4号地の格納庫、大型飛行艇飛行記念のスタンプ

出典：絵はがき(筆者蔵)